

その十一 離遠

夕陽は六法尾根に沈んだが、藍色の空に朱色の雲がこの世のものとは思えぬコントラストを示す。二年前の秋、岩手山で見た夕焼けを思い出す。黒馬は豊かな村だ。スキー客と別荘が落とす金が富をもたらす。赤い光が充満する立派な黒馬病院の四人部屋の病室で眠る美英子は普段から薄化粧だが、今はスツピンでまるで小学生のように見える。子供がそのまま大人になつたような感じがなんとも言えないほど可愛い。

「モリクン……アリガトウ」

この言葉が俺に詰め寄る。視界に守しか見えなかったから出た言葉なのか。それとも、最後の力を振り絞った言葉に深い想いを籠めたのか。

正直、美英子のことはよく知らない。付き合って二年になるが会ったのはたったの三回だけ。二人きりだったのは京都へのデートだけ。十回分ぐらいの刺激があっただけ……。

美英子は二十二歳のはず。結婚適齢期のだ真ん中。美英子が言う青春のクライマックス。守の言うように押しまくった方がいいのかも。しかし、俺はまだ二十一。男だから適齢期まで余裕があるが、甲斐性が無いという課題がある。一方、美英子は下町育ちとは言えそれなりの家で育った娘。俺にプロポーズ受験する資格はない。

そう言えば夏子が去つたのは現実には気付いたのが原因かも知れない。中原家は裕福だ。父親は実業家で府會議員。俺は結婚相手としてふさわしくなかったはず。分不相応な相手と付き合っていたのだ。

さて、美英子との言葉遊びがこの事故で途絶えるかも知れない。美英子の本心が守キリに向いている事が分かったからだ。でも守キリには正体不明の結婚相手がいる。

*

守キリは上町と別荘に戻って全員のバッグや手荷物を病院に運び込んだ。周りはすっかり暗い。患者でもあつた俺に代わって上町が美英子に付き添う。すぐ守キリが真剣な表情で近づいてくる。

「脇腹は？」

「大丈夫。赤チン、塗ってもらった」

冗談は通じなかった。

「悪いがちよつと付き合つて欲しい。急ぐ」

守キリは半ば駆けるように車まで歩く。エンジンが掛かったまま。俺助手席に向かう。

「頼れるのは二世だけ。さつき……」

ドアを閉めるとハンドルを切るために言葉を切った。

「……別荘にお袋から電話があつて、親父、ガンと気づいたらしい。すぐ帰つてこいと」
国道に出る。

「それが、松本駅で最終の名古屋行特急に接続する列車が黒馬駅を出た」

「松本じゃなく、まさか、このまま……」

「もちろん、国鉄で帰る」

「どうするんや」

かなり飛ばしている。オレンジ色のスピードメーターの針が八十前後で揺れている。

「追いつけくはず。何とかする」

「社長、やばいんか」

「年寄りのガンの進行は遅いが、いつ急変するか分からんらしい。疲れているのは分かってるけど……」

「後は何とかしろか……分かった」

「そういえば大阪から黒馬に来るまで二度仮眠しただけ。その上事故が……話題を変える。暗い話は避ける。」

「早い目に単位取つといて良かったな」

「二世^{フタセ}には感謝するわ。仕事で講義をサボってもカバーできた」

「お互い様や」

守^{モリ}はいつも「お宅」と呼ぶが今日は何故か「二世^{フタセ}」と呼ぶ。

「前期試験をこなせば後は卒論だけ。世話になりっぱなしや。これからも頼むな」

「なんでも言ってくれ」

何か熱いものを感じる。これが友情なのかという大袈裟なものじゃないけれど。ところが次の言葉に最近よく感じる違和感を覚える。

「今日の事やけど、東山^{ヒガシヤマ}さんは間違いなく二世^{フタセ}を見直すというか、大事にするはず」
俺は首を強く横に振る。

「東山はお前に気がある」

守^{モリ}も首を横に振る。

「あの時の『モリクン、アリガトウ』は目の前にいたから。上町さんから事情を聞けば誤解やとすぐ分かる。詳しく説明してくれと頼んでおいた」

友情に感動していたのに不自然さを感じた。

「頼むことやないやろ」

守^{モリ}はこくりと頷く。俺は知床での美英子のセリフを思い出す。

——昔から言うやんか。裸、見られたら、その人と結婚せなあかんで

「事故^{フタセ}とは言え、東山にすれば裸をさらけだした相手はお前や」

「二世^{フタセ}も……」と言いかけて「そうか」と守^{モリ}は眩^{ツツヤ}く。

「それにお前は命の恩人や。俺は好きなだけ。もう恋愛みたいなややこしい事、夏子でこりこり……やめとこ。こんな話……」

守の表情が急変する。そのとき左前方に長い光を見つける。

「オイ！ アレやろ！」

黒馬駅を出た列車に追いつく。見る見るうちに追い越す。光と言っても薄暗い黄色い光。ゆつくりと何とかな前に進もうとする健気（ケナゲ）な光。いや、優しさと悲しみを混ぜ合わせた複雑な模様を持つ光。守が戸惑い気味の低い声を出す。

「二世……どう言えば……許して欲しい事がある」

対向車の鋭いヘッドライトと共に、この突発的な守の言葉が飛び込んできた。

「何を言いたいねん。大分前から、お前、おかしい」

「散々助けてもらったのに……すまん」

涙声に変わる。

「結婚相手……」

守は前方を見たまま。俺はそんな守を見つめたまま。

「中原、中原夏子……」

「！」

すぐ自分を取り戻す。

——既に別れた女。別れても近づいてくる女

巨大な謎の九十九パーセントが瞬間的に蒸発したが、新たに百一パーセント以上の謎が生ま

れた。美英子がどうのこうのという以前の問題、いや、美英子は関係ない。

「どういうことや！」

速度を落とすと左に曲がる。駅が見える。

「悪い。後を頼む。……こらえて欲しい。なにかあったら上町さんに相談してくれ」
守はサイド・ブレーキを引くと改札口に走り出す。まったくの手ぶらだった。

*

どうやって別荘に戻ったか覚えていない。真夜中だったから病院に寄る事は考えなかった。中原夏子、十九。いや、この夏で二十のはず。守が占いの時に示した数字の意味がやっと分かった。分かったのはそれだけではなかった。

摩周湖の展望台で、そして神戸の学生会館の照明室で、夏子が現れた時、守はその場に居なかったが必ず近くにいた。偶然ではなかった……俺の居場所を知っていたのは守しかない。一年下だが夏子は年上の見える大人びた女子だった。

国公立大学への合格率が高い府立高校の受験前日に急性盲腸炎を患って、仕方なく滑り止めの——と言ってもそれなりの私立の女子高校に入学した。

付き合ってた分かったが聡明な女子だった。お互い大学受験期。俺は定時制から全日制に編入した言わば四年生、彼女はもちろん彼女は三年生。一緒に図書館や信州戸隠トカゲシの学生村で勉強したが、学力は彼女の方が遙かに上だった。女子には珍しく数学が得意で、受験に関係ないけ

ど俺が唯一自信を持っていた絵も彼女のほうがうまかった。

当然それなりの大学に入学したはず。旅行はもちろんの事、学生バンドのマネージャーをしたり、コンサートがあれば聴きに行く事もあるだろう。しかし、摩周湖や学生会館で会ったのは偶然ではなく夏子の方から近づいてきた。

もし摩周湖で夏子と守モリが通じていたのなら、俺と別れて数ヶ月も経たないうちに二人は付き合っていたことになる。夏子は頭がいいだけではなく感情表現が豊かな女子だった。どのようなきっかけで守は夏子を知ったのか。

——守モリには春夜がいる。なんで夏子と……

理解に苦しむなんて言うレベルではない。まったく何も知らずに俺は守モリを永遠の親友だと思つて今の今まで付き合ってきた。とにかく打ちのめされた。

*

——始めから手を握り合つて歩いていたら落ちなくて済んだのに。なんで拒否した！ やつぱり俺の事、嫌いなんか！

電話のベルで目が覚めた。大量の寝汗をかいていた。夢だった。

腕時計にピントを合わせながら電話機に向かう。上町からだつたが、すぐ美英子に替わる。

「ありがとう……」

腕時計にピントが合う。

「十時か。ごめん、ごめん。ほったらかしにして。具合は？」

「マモルこそ大丈夫？……」

——心配してくれている？

「良かった。すぐ病院に行く」

一方的に電話を切って車と別荘の鍵を持って車に飛び乗る。

——大したこと、なかった。

カンカン照りだ。信州と言えども暑い。何もかもが終わってさっぱりしたような気分になる。何故か三年ほど前、夏子と学生村に滞在したとき合格祈願で参拝した戸隠奥社の杉並木が脳裏に浮かぶ。そのとき詠んだ句を思い出す。

——太陽を 殺して青し 夏の杉

たっぷり寝たので全身に力がよみがえる。

——すべてを断ち切る！

美英子は病院前のバス停のベンチに座っていた。別荘に着いた時と同じ長い赤いスカート姿で。上町と一緒に手を振る。元気そうだ。バス停の先で停車する。車を降りて美英子に近づく。

「助けてくれて……」

「体調は？」

敢えて言葉を遮るが、美英子はふらつきながら立ち上がると俺の手を握って身体を支える。

「マモルも無事で良かった」

もう一度尋ねる

「体調は？」

「元氣、元氣。せやから病院、放り出されたん」

美英子は精一杯の笑みを浮かべるが、百パーセントにはほど遠い笑顔だった。

「ひどい病院やな。じゃあ、このまま松本駅まで送るわ。今なら余裕で大阪に帰れる」

「えっ！」

美英子は俺を呆然と眺める。上町に美英子を預けて手荷物などを車に載せる。そして美英子は上町にもたれるようにしてゆつくりと助手席に乗り込むが黙ったまま。俺が運転席に座ると後部座席から上町の声がする。

「二世君はどうするの」

「送ってから大阪に帰る」

美英子の視線を感じるが黙ったまま車を出す。

事故当時、上町は助けを求めに黒馬大池から離れていたから現場を見ていない。しかし、守りは昨日、上町と荷物を別荘へ取りに戻ったとき詳しく説明したに違いない。本人もそう言っていた。俺から言う事は何もないと黙っていると美英子がポツンと言葉を置く。

「ウチ、どうやって助けられたん？」

俺は上町に視線を移す。

「上町さんから聞いたやろ」

「マモルに訊いてるん。ねえ、教えて……」

返事をしないので美英子は仕方なく話題を変える。

「守君のお父さんの具合、かなり悪いの？」

先ほどよりもつと間隔を置いて可能性のようなものを思い浮かべながら返事する。

「末期のガンやて……親父が生きているうちに結婚するらしい。それで……」

「結婚！」

美英子は叫ぶと全身を小刻みに震えさせて身体を「く」の字に折る。俺は続きの言葉を止める。沈黙が始まった。何か得体の知れないものが車内を包む。窓からの風も流れず漂う。奥歯を噛みしめて戦うでもなく逃げるでもなくハンドルを握る。美英子の身体は折れたまま。

*

松本駅に着いた。切符売り場に近いところに車を止める。

「寒気がする」

「グリーン車は冷房が効いてる」

美英子は降りようとはしない。

「一緒に帰りたい」

この言葉に驚くがすぐ冷める。美英子が何とか身体を捻って上町を見つめる。

「上町さん、一緒に帰る。ウチ、運転だけへんし……ねえ……」

「車は疲れるわ。それに昨日の今日やし」

上町は俺の意を汲んだのか美英子の手を取る。美英子は目を閉じるが促されるまま、ゆつくりと降りる。俺も降りて無言のまま彼女たちのバッグや手荷物を降ろす。そして自分のバッグから茶色のカーディガンを引っ張り出して美英子に手渡す。

「足元はタオルでも掛けて冷やさんようにして、肩にこれ掛けとき」

美英子の反応を待たずに切符売場に向かう。すると上町の声がある。

「守君からお金、預かってる」

無視して窓口で大阪までの切符や特急券と釣り銭を受け取る。まだカーディガンを握りしめたまま美英子のバッグを持って改札口に向かう。早足で……そう、決心している。美英子に切符を押し付けるが受け取ろうとしない。急に顔を上げて俺をまっすぐ見つめる。

「ウチの事、嫌いなん？」

この言葉と視線を避けて上町に切符を渡す。そのまま返事を避けた言葉を返す。

「化粧ケース、忘れてへんやろな」

美英子は首を横に振って泣き出すとペンダントが揺れる。

「気をつけて帰って……電話するね」

その十一 離遠

返事の代わりに俺の腹が「グー」と鳴る。